



Data
監督・脚本・製作: ヴァーツラフ・マルホウル
原作: イェジー・コシンスキ『ペインティッド・バード』(松籟社刊)
出演: ペトル・コトラール/ステラ・スカルスガルド/ハーヴ・エイ・カイトル/ジュリアン・サンズ/パリー・ベッパ/ウド・キアー/イトウ・カ・ツバンツァロバー/アレクセイ・クラフチェンコ

みどころ

ホロコーストを逃れた少年の過酷な旅。原作の『ペインティッド・バード』(直訳すれば「色を塗られた鳥」)だが、邦題は『異端の鳥』。)はそんな言葉以上に過酷だ。章を追うごとにひ弱だった少年は「目には目を、歯には歯を」の報復をいとわない人間に！第76回ヴェネツィア国際映画祭でユニセフ賞受賞。なるほど、これにも納得。

原作は自叙伝？それとも創作？それをめぐる大論争のみならず、ゴーストライター疑惑や盗作疑惑まで持ち上がったそうだが、ヴァーツラフ・マルホウル監督の解釈は？少年役の俳優の発掘を含め、11年もかけた壮大な作業に拍手！

「ホロコーストもの」の代表作の一つ、「ゾンダーコマンド」を描いた『サウルの息子』(15年)も鑑賞後、どっと疲れが出たが、それは本作も同じ。しかし同時に大きな感動も。こりゃ、必見！

■□■ヴェネツィアでユニセフ賞を！その意味は？他の賞は？■□■

本作のチラシには、「第76回ヴェネツィア国際映画祭 ユニセフ賞受賞」とある。そして、パンフレットには、同賞の他、2017年カンヌ国際映画祭 クシシュトフ・ケシロフスキ賞、脚本賞、2019年シカゴ国際映画祭 最優秀撮影賞等々の受賞が並べられている。ヴェネツィア国際映画祭のユニセフ賞とは、“子どものための闘争”をもっともよく表現している映画に与えられるものだから、なるほど、本作はそれにピッタリだ。

もっとも、本作が“ヴェネツィア国際映画祭のコンペティション部門で上映されると、少年の置かれた過酷な状況が賛否を呼び、途中退場者が続出。しかし、同時に10分間のスタンディングオベーションを受け、ユニセフ賞を受賞し、同映画祭屈指の話題作となっ

た。”そうだ。そして、“本作はその後も、多くの批評家から絶賛を浴び、アカデミー賞国際長編映画賞のチェコ代表にも選ばれ、第32回東京国際映画祭においても「ワールド・フォーカス」部門で上映され、高い評価を得た。”そうだ。

ヴェネツィア国際映画祭で『ジョーカー』以上に話題を集めたうえ、ユニセフ賞を受賞した本作は、一体どんな映画？

■□■原作は？監督は？邦題は？■□■

本作のチラシの表には、「発禁の書、半世紀を経て奇跡の映画化 戦争とホロコーストの本質に迫る傑作！」と書かれており、裏には、「戦火を逃れ、少年はたった一人で、人間の悪意に対峙する一。モノクロームの圧倒的な映像美で描かれる、3時間の驚異の映画体験！」と書かれている。また、チラシの表に写るのは、土の中に埋められ、頭だけを出した少年が、一匹のカラスと“ご対面”している写真だ。その上空には多くのカラスが群れをなしているから、近いうちに少年の頭はカラスたちのくちばしで血だらけ。そんな不気味なモノクロ写真をただで本作の“本質”がわかるが、同時に「僕は、生きて、家に帰る」という力強い言葉が載っているのは、多少の救いになるかも・・・？

日本人には全く馴染みのないヴァーツラフ・マルホウル監督が脚本を書き、11年間もかけて苦勞に苦勞を重ねて本作を完成させたのは、何よりもイェジー・コシンスキの原作『ペインティッド・バード』に惹かれたためらしい。そのことは、パンフレットにある「監督声明 Director's Statement」と「監督インタビュー」を読めばよくわかる。しかして、コシンスキが1965年に刊行した『ペインティッド・バード』（邦題『異端の鳥』）とは一体ナニ？

■□■ペインティッド・バードとは？少年の“異端ぶり”は？■□■

その詳細はパンフレットを読んでもらいたいが、「同小説は刊行直後からセンセーションを巻き起こすも発表当初からバッシングにさらされ、近年ではゴーストライター疑惑や盗作疑惑がもたらがり、また主人公の少年がたどった経験と作家の伝記的事実との相違など、大いに物議をかもしつつ、現在に至るまでロングセラーとなっている。」そうだ。それはともかく、そもそも『ペインティッド・バード』＝「色を塗られた鳥」とは、どういう意味？

その意味は「レッフとルドミラの章」でレッフが戯れにペンキを塗った小鳥を空に放つシークエンスを観ればよくわかる。レッフの手から放たれた小鳥は仲間たちの群れに合流しようとしたが、羽にペンキを塗られたことにより“異質な存在”となった小鳥が、その後には辿った無残な運命とは？私は本作の邦題を見てもその意味が分からなかったが、このシークエンスを見て、なるほど、なるほど。

また、マルホウル監督が主人公の少年（ペトル・コトラール）の過酷な旅を「マルタの章」、「オルガの章」、「ミレルの章」等で追い、それに続いて、上記のシークエンスを入れた「レッフとルドミラの章」を設定したことに納得。もっとも、モノクロ映像だけではこの少年が黒い瞳と髪、オリーブ色の肌を持っているため“異質な存在”として蔑まれてい

る事は、多民族国家ではなく単一民族である日本で生まれ育っている日本人の私たちにはわかりづらい。2020年2月に突如発生した新型コロナウイルス騒動の中で、日本人の“同調性”についての考察が深まってきたが、コロナ騒動でハッキリわかったように、日本人も“異端”を嫌う面では、決して引けを取らない民族だろう。そんな視点で『異端の鳥』と邦訳された本作を、そして本作の主人公である少年の“異端ぶり”をしっかりと確認したい。

■□■これは自叙伝？それとも創作？■□■

本作は一般的には“ホロコースト映画”の範疇に入るもの。チラシでも「第二次世界大戦中ホロコーストから逃れて田舎に疎開した少年」と書かれている。しかし、監督インタビューの中でマルホウル監督は、本作は「戦争映画でもホロコースト映画でもなく、時代を超越した普遍的な物語だ。」と述べたうえ、「暗闇と光、善と悪、真の信仰と組織化された宗教、その他の多くの相反するものに苦しむ物語」と続けている。前述のとおり、イエジー・コシンスキの原作の最大のポイントは、自叙伝かそれともフィクションかということだが、この監督インタビューを読めば、マルホウル監督にとっては、その点についても「私にとって、本が彼自身の体験を反映しているか、そうでないかは完全に無関係だ。なぜなら、芸術作品の本質的な要素は伝記としての真実ではなく、その真実性だから。“実話に基づいている”と正式に主張する映画でさえ現実ではない。」らしい。その他、監督インタビューで語られている内容は極めて難解だが、本作を鑑賞するについて、これは必読だ。

■□■少年役の俳優はどこで発掘？その他の俳優は？■□■

他方、本作は169分の長尺でその間ずっと少年は出ずっぱりだが、導入部で観る、隣人から疎まれ村の子供達から残忍な仕打ちを受ける少年と、ラストに観る戦争孤児たちと一緒に暮らす孤児院の少年とは、大きく違っている。つまり、良くも悪くもその成長ぶりがよくわかる。当初のひ弱な少年から大きく変化し、たくましさを身につけたのはある意味当然だが、同時に“異端の存在”としていじめられ、攻撃される少年から、躊躇なく「目には目を、歯には歯を」と報復する少年に変化していることは明白だ。少年に「目には目を、歯には歯を」の考え方を教えたのは、ラスト近くの「ミートカの章」に登場するソ連軍の狙撃兵ミートカ（バリー・ペッパー）だが、彼が別れ際に少年に与えた“あるプレゼント”とは？他方、何度も死地をさまよった少年が本当の意味で“九死に一生”を得たのは、「ハンスの章」に登場するナチス兵へハンス（ステラン・スカルスガルド）の優しさによるものだ。この章は、足を怪我した馬との出会い、その馬を殺してしまう隣人たち、その村を完全に占拠して宴会に狂うコサック兵たち、そこを攻撃しコサック兵を皆殺しにしてしまうナチスドイツ軍等、それらが登場するスリリングな章なのでとりわけ興味深い、そこでのハンスと少年との物語はある意味手に汗を握るものがある。

この2つの章でハンス役を演じたステラン・スカルスガルドと、ミートカ役を演じたバリー・ペッパーは2人とも有名な俳優らしい。その他の章でも、マルホウル監督が起用し

た俳優はかなりムチャな演技を強いられる女優陣(?)を含め、すべて有名で演技力抜群の俳優ばかりらしい。それに対して、少年役を演じたペトル・コトラールは、キャスティングではなく偶然の出会いで見つけたズブの素人。マルホウル監督が行ったテストは①カメラテストと②心理テストの2つだけだそうだが、本作の成否は90%以上この少年の演技力にかかっているから、本作を鑑賞するについては、彼の、とりわけ後半以降の鬼気迫る演技に注目したい。

■本作の言語は？インタースラヴィックとは？■

日本は島国だし、日本人は単一民族だから、大陸から伝わってきた漢字を基本とし、そこに平仮名を組み合わせて極めて美しい日本語を完成させ、日本民族はすべてそれを使ってきた。しかし、東方のスラブ系民族は複雑だから言語も複雑で、「ポーランド語、チェコ語、スロヴァキア語、ウクライナ語等、様々あり、そのどれかを選ぶと映画の場所がその国に特定されてしまう」らしい。そのため、チェコ人のヴァーツラフ・マルホウル監督は本作で、「スラブ諸民族の間の人工共通語であるインタースラヴィック（メジュドウスロヴァンスキー）という言語を採用した」そうだ。

そのことについては、パンフレットにある、沼野充義（ロシア東欧文学者・東京大学名誉教授）の「コシンスキと『ペインティッド・バード』の残酷な歴史的背景」を読んでももらいたいが、それを聞いただけでも、原作『ペインティッド・バード』の過酷さを想像することができる。もちろん、そんな言語上の問題は、私たち日本人には全くわからないが、その意味についてはしっかり勉強したい。

■最終章は感動的な結末に？いやいや、それは甘い！■

私は2020年5月20日付で、『ヒトラーモノ、ホロコーストもの、ナチス映画大全集一戦後75年を迎えてー』を出版した。同書には計72本の映画評論を掲載したが、その中で断トツに恐ろしく、鑑賞後にどっと疲れが出た作品が、「ゾンダーコマンド」を主人公にした『サウルの息子』（15年）（『シネマ37』152頁）だった。もちろん、同作は近頃の邦画のような、明るいカラーの画面ではなく、モノトーンの暗い画面だったが、それは本作も同じだ。「ゾンダーコマンド」は、「大量のユダヤ人を裸にしてガス室に送り込み、一斉に殺害した後、金目の物の整理の他、死体の片づけや汚物の掃除、そして焼却した死体の灰の処理など」をお仕事とするものだったから、その作業中は死体のにおいまで感じられる迫力だった。他方、本作では章が進むにつれて少年の“異端ぶり”が次第にくっきり見えてくるので、迫力においては決して『サウルの息子』に引けを取らない。それと同時に、前述したように、ペトル・コトラール少年の成長に伴って撮影を続けてきたこともあって、当初のひ弱だった少年から、「目には目を、歯には歯を」の報復をいとわない、たくましい少年に変化していく姿は迫力がある。

しかして、最終章の「ニコデムとヨスカの章」では、ある日、孤児院で、一人鋭い目を光らせている少年を、見知らぬ男が現れ、「帰ろう、お母さんが待っている。」と言ったか

ら、さあ、ここまで苦難続きだった少年にも、ここでやっと感動的な結末が！？お手軽な邦画を観慣れた日本人観客がそう予見するのも当然だが、さて、本作は・・・？

そんな視点からは、本作のラストは、単純で感動的な父子の再会にはならないと、私は予想したが・・・。

2020（令和2）年10月19日記